



白梅学園の先駆者たち②

牧野 英一

—日本の刑法学の泰斗—

学校法人白梅学園理事長 小松 隆二

1

白梅学園の発展を大きく支えた先達の一人に牧野英一がいる。刑法学者としては、戦前日本を代表する一人であり、法律のみか日本そのものの民主化や近代化にも貢献した人物である。

牧野が本学園の学園長を勤めたのは、昭和二十七年から昭和三十七年までのほぼ一〇年間である。まだ東京家庭学園と称した時代から、白梅保母学園時代を経て短大創設時の初代学長にまで及ぶ時代である。穂積重遠初代学園長の没後、二代目として就任されたものである。もともと牧野と白梅学園あるいは社会教育協会との関わりは遠く戦前にまで遡る。

牧野ほど華麗な経歴の持ち主が白梅学園と関わるようになったのは、穂積初代園長と同様に、社会教育協会および小松謙助との関係からである。大正から戦前昭和にかけて、大正デモクラシーの流れの下で民衆本位の政治や教育が叫ばれるが、彼らはともに民衆本位の立場からその流れを押し進めようとした運動の同士でもあったのである。

なお牧野は、白梅学園との関係では、学園長・学長・名誉学長に加えて社会教育協会からの著作の刊行、講座の講師など多様な形で関係し、貢献している。

2

牧野は、東大法学部教授、そして刑法学者として刑法中

心に日本の法体系の発展を支えてきた先達である。明治一年に岐阜県高山市の生れ。第三高等学校を経て東京帝国大学に入学。卒業後、法学部講師、助教授、そして欧州留学を終えて帰国した大正二年に教授に昇格している。

その後、学士院会員、貴族院勅選議員、法制関係の各種審議会委員、会長などを歴任。文化勲章受賞。昭和四五年、九二歳という高齢で逝去している。著作は、名著とされる『刑法学の新思潮と新刑法』（警眼社、一九〇九年）はじめ、一〇〇冊を超えるが、その多さは学者としては超人的ともいえるものである。

牧野は刑法学者とはいえ、民法、法哲学など広い領域や課題にわたって論究し、活躍した。形式主義から解放された自由法論を根幹に、目的主義と主観主義に立脚する法理論を展開したことは、周知のことである。ことに刑法犯とはいえ、人間として愛を持った対応、そして生存権を認める主張を早くからなしたことも、時代に先行するものであった。

この点に関連して注目されるのは、牧野が早くも大正の末から法律の社会性・人間性、さらに昭和に入ると倫理性にも着目した点である。それらは、いずれも現代に生きる視点であるが、大正デモクラシーの流れと密接な視点・主張であった。

また牧野は実践家には一歩譲る姿勢を示している。近代の監獄、少年院などの教護事業と行政にも強い関心を示し、その運営や近代化に勤めた先駆者との交流を大切にした。

例えば、明治、大正期にわたって、明治初期の慈善事業、さらに明治後半の感化救済事業を、より近代的な社会事業に高めることに教護事業の実践を通して貢献した留岡幸助、有馬四郎助、原胤昭らに篤いエールを送る人間的絆を、牧野はもっていた。彼が留岡幸助の北海道家庭学校（非行少年の更生・社会的自立をめざす教護院）を訪うていること、そこで著名な「最後の一人の生存権」と題する講演を行っていること、さらに記念植林をしていることは、よく知られている。私も北海道家庭学校には一度訪れているが、谷前校長の案内で牧野林が現在も目立たないながらも、強く生きていることを自らの目で確認している。

このように実践家を尊敬したこと、東京帝国大学教授の特色であった髭などをはやさなかつたこと、論文は答案用紙など用済みのものを常用したことなどに、その庶民性を読み取れることもできようが、それらに牧野が白梅学園長を引き受けるのと共通する庶民的な側面を読み取ることもできよう。

牧野に関しては、高円寺時代の白梅学園で、私はただ一

度のみ尊顔を拝している。偉大な先生に一度触れてみるのも悪くないだろうという小松謙助の配慮でお会いさせて頂いたのであった。すでに度の強い眼鏡とステッキを持つ高齢で、老人の趣きの強さを印象付けられたが、大先生として紹介されたので、記憶には強く残っている。

その牧野の晩年の主張や姿勢には批判も少なくない。人間であれば誰もが各種の批判は避け得ないことではあるが、牧野の場合も、晩年の姿勢に関しては批判が少なくないことも事実である。

例えば、我妻栄のように、一方で冷静に高く評価しつつ、他方で戦後の民法改正に際してみせた牧野の保守性・後向き姿勢に対する厳しい批判がその例である(我妻栄「牧野英一先生」『書斎の窓』一八九号、昭和四五年七月号)。また大正・戦前昭和期には反権威の視点に立ちながら、東京大学教授として学会・学界活動をする場合、結局権威の中に埋没した姿勢を示した一面など、批判は多々ありうる。私は、戦後の民法改正時には、牧野はすでに高齢にすぎたのではないかと考えている。本来改正の審議に参加する年齢を超えていたのではないかという面からの同情・擁護論である。

にもかかわらず、民主主義や自由が十分に開花しなかった戦前に、牧野の果たした役割、例えば大正デモクラシー

の代表的イデオログ、吉野作造を高く評価し、その言動を支持したり、吉野の死に際しては葬儀で吉野の履歴朗読の労をとったりしていることなども忘れてはならない。牧野の白梅学園への関与・協力にも、大正デモクラシー時代以来の牧野における反権威・民衆性の残存が感じられる。多くの名誉職をいただきながら、小さな白梅学園長を勤めたことで、東大時代とは違った肩肘の張らない仕事の楽しみを味わったのではないかと推察している。

冒頭の牧野英一氏の写真は、文中に出てくる「最後の一人の生存権」大正十三年人道社刊のものを転載しました。